

梗概

文明の発達とテクノロジーの目覚ましい進化により世界がますますグローバル化しており、国境を超えた人の移動と国際的な情報通信が日常のものとなっている。21世紀を迎えた今、世界各国で第一言語に加えて第二言語、第三言語の学習の重要性が唱えられている。一方で、第一言語の獲得期に親の国境を超えた移動に伴って異言語・異文化環境に入ることを強いられる学生数が急増している。また、国際結婚家庭も増え、生まれた時から家庭で二言語、二文化を持つ児童生徒など、彼らの言語的・文化的背景の多様化が進んでいる。

日本では、「バイリンガル」というと、日本語を母語とする人が英語と日本語を同等に使える日英語の均衡したバイリンガルをイメージすることが多く、それ以外の二言語、時には三言語の組み合わせで、多様なレベルで言語を使い分ける人たちのことを一般的にはあまりイメージされないだろう。英語だけでなく、中国語や韓国朝鮮語、ベトナム語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語等、多様な言語を家庭で使用したり、家族のルーツの言語として学習したりしながら、同時に日本語も生活・学習言語として使用する複言語環境にある学生たちのことについて考えたい。

多言語使用家庭に育った大学生の言語能力は、就学形態、言語環境、本人の性格や言語適性によって幅があるが、こうした子どもたちが一様に直面するのは、ことばに関わる問題である。その言語に対する接触量や習得の過程など、様々な要因により個人差はあるものの、複数言語の保持・伸長は容易でない。言語的にも、文化的にも、家庭環境においてもハンディを背負わされる児童生徒たちが受け入れ態勢の整っていない学校へ入ってくれば、現場が多様な背景の児童に対応しきれず、困難を極めた状態になってしまう。筆者のフィールドは、帰国生徒や海外子女といった多言語環境に育った学生であり、とりわけ彼らの言語能力の変化(習得、保持、喪失)に関心を寄せている。複数言語を伸長させていく難しさを当事者の視点をもって捉えているためであり、こうした背景が研究の強い動機となっている。

本稿は、「多言語使用家庭に育った大学生」を対象として、日本語中国語バイリンガル大学生10人を調査する。まず、多様な背景を持つ日本語中国語バイリンガル大学生を紹介し、次に、2言語の学習経歴と母語母文化の保持状況を調査し、最後に質的手法が用いられた言語使用状況を分析・考察する。多言語社会になりつつある日本社会において、バイリンガル言語使用の状況を考察することは有意義なことと思われる。

キーワード：バイリンガル、母語、第一言語、母語、母文化、多文化